

ウェスレーとピューリタン

馬淵 彰

本稿は、ジョン・ウェスレーとピューリタンとの関連についての解釈がどのように発展してきているかという問いに対して、ジョン・ウェスレーとピューリタンとの関連を扱った先行研究を考察することで答える。まず、第一章で、ジョン・ウェスレー（以下、「ウェスレー」と略す）からピューリタンの要素を引き出すことに貢献した諸研究を出版年順に整理し、それらの研究の成果や研究内容・視点の推移を明らかにする。第二章では、ウェスレーのピューリタンの要素をウェスレーの全体像においてどのように位置付けるかという課題と、ウェスレーとピューリタンの関連を示唆する諸要素の再検討の問題を論じる。

I. 研究史

ウェスレーとピューリタンの関連についての研究史は、ロウ (K.E. Rowe) や藤本満氏などが紹介している。両者の説明は、このテーマによる研究がセル (G.C. Cell) の研究から始まり、ニュートン (John A. Newton) やモンク (Robert Monk) の研究まで発展したという簡単なものに留まっている¹。ウェスレー全体の研究の基礎知識としてならこの程度の

説明で十分であろうが、ウェスレーとピューリタンの関連に焦点をあてた考察では次の二つの理由から不十分と考えられる。第一に、藤本氏やロウの説明では、先行研究が扱ったウェスレーのピューリタンの要素を詳細に論じてはいない。第二に、セルやニュートン、モンクの三人の研究者以外にも重要な研究成果を出した多くの研究者がそれら三人の前にも後にも存在するが、それらに言及していない。以下、より詳しい研究史がどのようなものであるかを分かりやすく説明するため、便宜上、三つの時期に区分して研究史をまとめる。

第一の時期は、ウェスレーの時代から 1960 年までである。この時期には、ウェスレーとピューリタンの関連が断片的に分析されていた。第二の時期は、1960 年代前半から半ばにかけてである。この時期に、両者の関連を総括的に分析する試みがなされた。第三の時期は、1960 年代後半以降から現在までである。この時期では、第二の時期の総括的分析に対する補足的な研究がなされている。

A. 第一の時期（断片的分析：1960 年まで）

ウェスレーとピューリタンの関連の分析は、20 世紀前半のセルの研究まで皆無だったわけではない。なぜならば、ウェスレー自身はその先駆者であったからである。周知のごとく、ウェスレーは二重予定説などのカルヴァン主義神学の諸問題を真剣に論じた。その目的のために、カルヴィニズムを徹底的に分析し、1745 年 8 月 1 日に開かれたブリストルでのメソジスト集会では、メソジズムがカルヴィニズムと髪の毛一本の幅の違いに過ぎないと彼は語っている²。カルヴィニズムの影響を受けたピューリタンの教えとメソジストの教えとの関連にもウェスレーの関心はおよび、たとえば、クエーカ

¹ Kenneth Rowe, "Editor's Introduction," in Kenneth Rowe, ed., *The Place of Wesley in the Christian Tradition*, (Metuchen, 1976) p. 3. 藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990 年、426-7 頁。

² John Wesley, *The Works of John Wesley* (以下 *Works* と略す), 14 vols., (Michigan, 1986) Rep. from the 1872 edition issued by Wesleyan Methodist Book Room, London, Vol. VIII, pp. 284-5.

一とメソジストの比較の小冊子などを記している³。メソジスト運動でのウェスレーの活動に協力した人々も、あるいは、ウェスレー死後のメソジストたちも、ウェスレーと同様にメソジストとピューリタンとの関係を見逃さず、絶えず関心を払ってきたに違いない。今回は調査していないが、ウェスレーの教えにおけるピューリタンの要素については、その時点から膨大な量の考察が様々な視点からなされ続けていたと思われる。

ウェスレーとピューリタンの関連に対する関心を一般の研究者のあいだに引き起こした最初の研究者は、おそらくマックス・ウェーバーであろう。彼が1904年から1905年にかけて発表した論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、ウェスレーの言葉「できるかぎり稼ぎ、節約し、富裕になること」を、カルヴィニズムの経済倫理をあらわす標語として引用した⁴。これにより、ピューリタニズムとウェスレーの教えが比較される道が開かれたのである。

1926年には、当時流行していた心理学的分析を用いてディモンド (S.G. Dimond) が *The Psychology of the Methodist Revival* を著し、「メソジストの特性には最初からピューリタンの気質が見られる」と断じた。ニュートンは、ディモンドのこの研究をウェスレーとピューリタンの関係を扱った最初のものとして扱っている⁵。なお、ウェスレーからカルヴァンの要素を引

³ John Wesley, *A letter to A Person Lately Joined with the People Called Quakers*, in *Works*, Vol. X, pp. 177-188.

⁴ Max Weber, “Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, XX / XXI (1904-5) 梶山力、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1955-62年、下巻232-3頁。

⁵ S.G. Dimond, *The Psychology of the Methodist Revival*, (London, 1926), John A. Newton, *Methodism and the Puritan* (London, 1964) p.3. ニュートンは、ディモンドの研究以外にも、M. Edwards, *This Methodism* (出版地・出版年不明) や E.G. Rupp, *Protestant Catholicity* (London, 1960) の研究もウェスレーとピューリタンとの関連について言及していると指摘している。ただし、ニュートンはその内容について具体的には論じていない。

き出したとされる前述のセルの研究 *The Rediscovery of John Wesley* (1935) は、ウェーバーの研究から実に 30 年も後になってから登場する⁶。

この時期の分析は、個々の神学的な問題や経済倫理への関心、流行の心理学的分析方法など、ある特定の関心や視点からの分析に留まっている。ここに記さなかった膨大な量のメソジスト関連の過去の文献（神学や歴史などの研究書、パンフレット、雑誌、新聞など）も、神学や組織形態、讃美歌、文学など様々な点においてウェスレーとピューリタンとの関連に言及したと思われる。しかし、それらも両者の関連の一面を断片的に論じたに過ぎなかったに違いない。両者の関係を総括的に把握しようとした試みが 1960 年代以前に存在していたという報告はない。

B. 第二の時期（総括的分析：1960 年代前半）

第二の時期は、ウェスレーとピューリタンの関連の研究において画期的な時期である。それ以前の研究とは異なり、両者の関連の総括的研究を試みている。

なぜ、ウェスレーの死から 1960 年代までの約 160 年ものあいだ、このような研究が存在しなかったかは不思議である。しかし、この時期に体系的な研究が進んだのは、次の理由が考えられる。1950 年代までにウェスレーと他の教派との比較研究がすでに進行していたことである。ウェスレーとルター派との比較は、1943 年のリントシュトレームの研究や 1951 年のヒルデブラント研究によってなされた。また、カルヴァン派との比較はセルの 1935 年の前述の研究によってなされた。また、ドイツ敬虔主義・モラヴィア派との比較は 1953 年から 1956 年にかけてのシュミットの研究や 1957 年のトウルソンの研究によってなされた。そして、ローマ・カトリックとの比較でも、1925 年のピエトの研究や、1956 年のオルシバルの研究、1958 年

⁶ 藤本『前掲書』426 頁。G.C. Cell, *The Rediscovery of John Wesley*, (New York, 1935)

のトッドの研究によってすでに進められていたのである⁷。しかし、ウエスレーとピューリタンとの比較は、まだ試みられていなかった。この隙間を埋める研究が開始されたのは自然な流れである。

この時期の代表的研究は、デイヴィス (Horton Davies) の *Worship and Theology in England* (1961)、ニュートンの *Methodism and the Puritan* (London, 1964)、そして、モンクの *John Wesley: His Puritan Heritage* (1966) である⁸。デイヴィスによって着手された分析は、ニュートンとモンクの研究を経て質と研究領域の双方において充実していく。彼らの分析の軌跡を辿ることで、我々は、ウエスレーがピューリタンから受けたとされる具体的要素を知ることができる。

1. ホートン・デイヴィス

デイヴィスは、メソジスト会員の指導のためにウエスレーが採用した補助的礼拝様式 (ancillary services) に着眼する。国教会の礼拝様式だけではメソジスト会員の指導を十分にできないと察知したウエスレーは補助的礼拝様式を採用する。その様式は国教会のものとは異なる二つの伝統に源泉があるとデイヴィスは説明する。一つはモラヴィア派であり、他の一つはピューリタンである。デイヴィスは、ウエスレーが採用したバンド組織や讃美歌、愛餐、除夜祈祷会 (the Watch-night services) をモラヴィア派の伝統から

⁷ 藤本『前掲書』425-7頁。Harold Lindström, *Wesley and Sanctification*, (London, 1943; 野呂芳男訳、『ウエスレーと聖化』新教出版、1989) ; Franz Hildebrandt, *From Luther to Wesley*, (London, 1951) ; Martin Schmidt, *John Wesley*, (Zurich, 1953-66; 高松義教訳、『ジョン・ウエスレー伝』、新教出版社、1985) 2 vols.; C.W. Towlson, *Moravian and Methodist*, (London, 1957) ; Maximin Piéte, *John Wesley in the Evolution of Protestantism*, trans. by J.B. Howard (London, 1937) ; Jean Orcibal, “Les spirituels français et espagnols chez John Wesley et ses contemporains,” *Revue de L'Histoire de Religions*, vol. 139 (1951) , pp. 50-109; John M. Todd, *John Wesley and the Catholic Church* (London, 1958)

⁸ Horton Davies, *Worship and Theology in England* (1st ed. Princeton, 1961-2; rep. Michigan, 1961) ; Robert Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (Nashville, 1966)

の借用とみる。そして、ピューリタンの伝統からの借用としては、即興の説教、即興の祈祷、讃美歌、契約の概念を挙げる。デイヴィスの研究は具体的証拠に欠けるものの、ウェスレーとメソジストとの関係を総括的に分析しようと試みた先駆的研究である⁹。

2. ジョン A. ニュートン

ニュートンの研究は、20 ページにも満たない小冊子にまとめられたものに過ぎない。しかし、彼の分析は具体的説明を多く含みデイヴィスのものよりも説得力がある。彼の分析を、以下、四つの側面にまとめて説明する。

第一は、母スザンナからの影響である。13 才でアングリカンに改宗する以前に、ピューリタンの家庭での教育・訓練を通してスザンナの人格形成は既になされていた。改宗後も、スザンナはリチャード・バクスターなどピューリタンの書物を好んで読んだ。幼少のウェスレーにとって母スザンナはピューリタンの流れをくむ家庭の信仰指導者であり、その後のウェスレーのピューリタン気質の鍵となったと、ニュートンは指摘する。スザンナの信仰生活には次の4つのピューリタンの特徴が見られる。①瞑想や自己省察などのための時を入念に定めた時間割、②信仰のために日記を記すこと、③聖日の厳守、④家庭での信仰指導。スザンナは、敬神と献身、心の傾向、道徳性、神学的気質などキリスト教的全人格を通して、ウェスレーにピューリタンの影響を与えた。これは、ウェスレーが母親から無意識に受けたピューリタンの影響である¹⁰。

第二は、ウェスレーとピューリタン文献との関係である。1738 年以降、ウェスレーは、ピューリタンによって書かれた諸文献に強い関心を持ち、後にはそれらの文献を摘要して出版した。このことは、ピューリタンの影響をウェスレーが意識的に受け始めたことを示す。1746 年、ウェスレーは非国

⁹ デイヴィスは、讃美歌と除夜祈祷会をモラヴィア派からの影響とは言い切れないと補足している。Edmund Calamy, *Abridgement of Mr. Baxter's History of His Life and Times* を読んだ影響も指摘。Davies, *Worship and Theology in England*, pp. 190-191.

教徒のドッドリッジ (Philip Doddridge) に頼んで、メソジスト説教者たちが読むのにふさわしい本を紹介してもらっている。ウエスレーはそれらをクリスチャン・ライブラリーとして出版した。また、ウエスレーがニール (Daniel Neal) の *History of the Puritan* を 1739 年 5 月と 1747 年に読んだことも記録されている。ウエスレーは、1662 年の迫害下のピューリタンに深く同情し、同書はキングスウッド・スクールの教科書にも指定された¹¹。

第三は、ウエスレーの信仰内容である。ニュートンは、①神学、②典礼、③牧会、④家庭的敬神 (family piety)、⑤倫理の 5 つの要素に区分して説明している。①神学では、ウエスレーは、予定説や、論争好きな傾向、聖化についての不完全な解釈という点でピューリタンを批判している。しかし、ピューリタンといっても、様々なタイプのピューリタンが存在していたことをニュートンは指摘する。自由意志を説くグッドウィン (John Goodwin)、部分的に修正されたタイプのバクスター (Richard Baxter)、さらには、ピューリタンではあるがカルヴァン派ではないエリザベス期のビショップたちなどである。ウエスレーは、バクスターの *History of the Councils* や *Life and Times, Aphorisms concerning Justification, The Reformed Pastor* などを好んで読みバクスターを尊敬していた。ウエスレーは、真摯な姿勢、キリスト中心の信仰、聖書の権威の強調、福音的悔い改めや聖化 (霊的成長) の強調、確証 (聖霊の証し) などの点でピューリタンの神学を高く評価していた¹²。

②典礼は、先のデイヴィスとほぼ同じ内容なので説明を省略する。次の③牧会では、ウエスレーは、バクスターが著した *Reformed Pastor* をメソジスト説教者たちの実践マニュアルとして活用している。ピューリタンは「良き牧者」であることを重視し、個々人の必要や状況に適するきめ細かな個人的指導を行った。ウエスレーもバクスターのパターンに従って、指導者が家々を訪ねて指導を与える方法を重視したのである¹³。

¹⁰ Newton, *op. cit.*, pp. 3-7.

¹¹ *Ibid.*, pp. 7-9.

¹² *Ibid.*, pp. 9-14.

¹³ *Ibid.*, pp. 14-15.

④家庭信仰については、ピューリタンが家族・家庭での信仰生活を重視していたことをニュートンは指摘する。ウェスレーは、ヘンリー (Philip Henry) の *Method of Family Prayer* やアンブローズ (Isaac Ambrose) の *The Practice of Sanctification* (同書は"Family Duties"のセクションを有す)、アレイン (Joseph Allein) の *A Council for Personal and Family Godliness* といった文献をメソジスト説教者たちに用いさせている。「メソジスト・ソサエティーのアットホームさと家族的精神」にニュートンはピューリタンの影響をみる¹⁴。

⑤倫理では、「規則や『方法』の枠組のうちでの、活動的かつ自己訓練された生き方」がメソジストとピューリタンに共通しているとする。両者の教えは、正しい生活、実践的宗教、熱心なキリスト教信仰、愛によって働く信仰などの強調点で共通している。安息日厳守の実践は確かにピューリタンが起源であるとニュートンは断じる¹⁵。

第四の側面は、ウェスレーの仲間たちの存在である。ウェスレー以外にも、ピューリタンの教えや方法を高く評価していた国教会派指導者・信徒が存在した。ウェスレーの弟チャールズやフレッチャー (J.Fletcher)、グリムショウ (Grimshaw)、ヨーク (Thomas Coke)、ブラッケンベリー (Rober Carr Brackenbury)、ジャクソン (Thomas Jackson) などである。ウェスレーは孤軍奮闘していたのではなく、信仰について分かち合える仲間にも囲まれ、互いに影響し合っていたのである¹⁶。

このように、ニュートンの研究は、母スザンナの影響や、ピューリタン文献、ウェスレーの信仰内容、ウェスレーの仲間といった多岐にわたる要素へと分析領域を広げている。また、ウェスレーとピューリタン文献との関連に言及することで、具体的説明に乏しかったデイヴィスの研究よりも説得力がある。

3. ロバート・モンク

¹⁴ *Ibid.*, pp. 15-16.

¹⁵ *Ibid.*, pp. 16-17.

¹⁶ *Ibid.*, pp. 17-19.

ニュートンの研究が小冊子ほどのものであったのに対し、モンクの研究は紙数の多い学術書としてまとめられている。当然、具体的説明や証拠の量もニュートンのものに比べ格段に増えている。モンクの研究は、基本的にはデイヴィスやニュートンの研究の延長線上にある。勿論、彼が新たに指摘した要素もある。しかし、彼の研究は、独自の視点で全く新しい解釈を打ち出すというよりも、デイヴィスやニュートンの研究ですでに言及されていた要素の分析を極めたものと考えられる。彼の分析において核となるのは、ウェスレーとピューリタン文献の密接さである。これは、すでに見たようにニュートンも言及していることである。しかし、モンクはこれを研究の中心に据え、ウェスレーとピューリタンの密接さをより力強く実証しようと試みた。それ故、幼少のウェスレーが母スザンナから受けたピューリタンの影響をニュートンほど重視しない¹⁷。

モンクの研究は、内容的に大きく二つの部分に分けられる。第一の部分は、ウェスレーによるピューリタン文献の出版についてである。もう一つの部分は、ウェスレーの信仰の個々の要素とピューリタン文献との関連についてである。

まず、第一の部分では、モンクは、ウェスレーがメソジストたちのために出版したクリスチャン・ライブラリーに焦点をあてる。同ライブラリーによってウェスレーが出版した文献の執筆者 60 人中 32 名が「広い意味」でのピューリタンであった。次に、クリスチャン・ライブラリー以外の約 50 の文献の執筆者も調べる。すると、3 分の 1 以上の執筆者がピューリタン神学者であった。デイヴィスやニュートンもウェスレーがピューリタン文献を評価し活用していた事実に言及したが、彼らの研究からはその規模は全く分か

¹⁷ Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage*, pp. 22-3. モンクの研究内容は、野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』（日本基督教団出版社、1975年）でまとめられている。本稿でのモンクの研究内容についての説明は、この野呂氏のまとめに多く依拠している。野呂『前掲書』421-430頁。

らなかった。モンクの分析によって、ウェスレーの中でピューリタン文献が他の文献と比較していかに重要であったか判明した¹⁸。

しかし、ウェスレーはピューリタン文献の内容を部分的に削って出版していた。そのため、ウェスレーはピューリタンの文献から影響を受けたのではなく、自分自身の主張に適う部分だけを選びピューリタン文献を単に利用したに過ぎないのではないかという疑問が生じる。この点も、デイヴィスやニュートンの研究では答えがない。モンクは、ウェスレーがピューリタン文献を摘要した仕方について分析する。分析の結果、モンクは、ウェスレーの摘要は神学的配慮によってなされていたと論じる。摘要で排除したのは、カルヴァン主義的予定論やウェスレーの「キリスト者の完全」に反する教理といったものに限られていた。それ故、それ以外のピューリタンの要素は、文献を通してウェスレーやメソジスト運動に浸透していったものと考えられる¹⁹。

第二の部分で、モンクはピューリタンの要素がウェスレーの信仰の各要素とどのように関連しているか考察する。彼の考察は、①神学と②信仰生活の二つの側面に分けてなされる。

①神学では、体験や原罪の強調、信仰義認、確証（聖霊による証し）、契約の神学、聖化などデイヴィスやニュートンによってすでに指摘された諸点も含めて再検討している。信仰義認では、ウェスレーは二重予定説に否定的なバクスターやグッドウィンらの著書を摘要して出版している。また、聖化に関しては、デル（William Dell）やプレストン（John Preston）の文献との関連をモンクは論じる²⁰。

デイヴィスやニュートンの研究では触れられていなかった神学的要素としては、モンクは信者の罪の悔い改め（Sin and Repentance in Believers）と最後の義認（Final Justification）に言及する。ウェスレーは、モラヴィア派の静寂主義を批判して信者の罪と悔い改めを強調したが、その時、律法的悔い改め（legal repentance）や福音的悔い改め（evangelical repentance）

¹⁸ Monk, *op. cit.*, pp. 38-46.

¹⁹ *Ibid.*, pp. 47-61.

²⁰ *Ibid.*, pp. 76 and 113-118.

という表現を用いた。しかし、これらの表現はすでにボルトン (Robert Bolton) やオーウェン (John Owen) がすでに使っていたのである²¹。

②信仰生活についてモンクは二つの領域に分けて論じる。それは、個人と家族(家庭)の領域と教会と世界の領域である。

前者の領域では、個人の信仰生活について、モンクは、自己省察のために日記をつけることや祈りと瞑想のために時を定めることなどウエスレーが影響を受けたピューリタン慣習に触れ、それらの慣習とスタックレイ

(Lewies Stuckley) の *A Gospel Glass* などの文献との関連性を指摘する。また、家庭の信仰生活については、家庭における敬虔の重視についてヘンリーの *Method of Family Prayer* との関連を論じている²²。

後者の領域では、教会での信仰生活について非国教主義と聖職叙任、ソサエティー、牧会の四点からモンクは論じる。非国教主義では、1746年、ウエスレーがキングの *Account of the Primitive Church* を読むことにより、「教会が神の意志に沿わない場合には、従わなくても良い」とする1662年当時のピューリタンの教会観を受け入れたことをモンクは指摘する。聖職叙任でも、ウエスレーは長老による按手についてキングの本から影響を受けていた。そして、牧会に関しては、ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards) の *An Account of the life of the late Rev. Mr. David Brainerd* やバクスターの *The Reformed Pastor* などの文献の影響が見られる²³。最後に、世に対する信仰生活については、ウエスレーは世を捨てる神秘主義を否定し、この世での生き方を重視して信仰生活を隣人の精神的・物質的な福祉のために働かせることを強調した。これは、バニヤン (John Bunyan) の *Pilgrim's Progress* などに描かれているピューリタンの姿勢と共通する。また、モンクは罪を犯す人々への叱責についてのウエスレーの考えも、バクスターの *The Saints' Everlasting Rest* と共通しているとする²⁴。

²¹ *Ibid.*, pp. 119.

²² *Ibid.*, pp. 171 and 182.

²³ *Ibid.*, pp. 194, 202 and 220-222.

²⁴ *Ibid.*, pp. 227 and 233.

このように、ウェスレーとピューリタンの密接さを、モンクはウェスレーが用いたピューリタン文献という具体的証拠によって実証しようとした。1960年代前半になされたウェスレーとピューリタンの関連についての一連の総括的研究はモンクの研究によってピークに達し、彼の研究成果はその後の研究者から金字塔的なものとみなされた。

C. 第三の時期（補足的分析：1960年代後半以降）

ロウや藤本氏によるウェスレーとピューリタンの研究史の説明は、モンク以降の研究に言及していない。しかし、ウェスレーにおけるピューリタンの要素を指摘する研究はモンクの研究以降も途絶えていない。モンクのような総括的な研究は殆どなされていないものの、すでに指摘された要素をより詳細に論じたり、あるいは、新たな要素を発見したりする補足的研究がなされている。以下、そのような補足的研究の動向について、八つの研究を取り上げて考察する。

先行研究によって既に指摘された要素をより詳細に分析した研究としては、次の二つを挙げられる。一つは、前述のニュートンが1968年に著した *Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism* である。スザンナからウェスレーへの影響を、モンクは「無意識のもの」としてそれほど重視しなかった。しかし、ニュートンはスザンナのことを「メソジストの家母長 (Matriarch)」、あるいは「メソジズムの母」とまで表現し、母スザンナからウェスレーへのピューリタンの影響を再び強調した²⁵。もう一つは、1979年にクリフォード (Alan C. Clifford) が著した論文である。クリフォードは、クリスチャン・ライブラリーの文献リスト作成に貢献した非国教徒ドッドリッジについての分析を掘り下げた。クリフォードは、ドッドリッジ

²⁵ John A. Newton, *Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism*, (London, 1968), pp. 185-200. ニュートンは The United Methodist Publishing House ed. *Encyclopedia of World Methodism*, (1974) でも “Puritanism and Methodism” の項を執筆し、そこでもスザンナの役割を強調している。また、John A. Vickers ed., *A Dictionary of Methodism in Britain and Ireland* (London, 2000) でも、ピューリタンの項を執筆している。

のバクスター的福音主義がホイトフィールドのカルヴィニズムとウェスレーのアルミニアニズムとを結ぶ「中庸 (via media)」を提供したのだと論じる²⁶。

このように、すでに指摘された諸要素を新たな視点をもってより詳細に論ずる研究も続けられているが、他方、全く新たな要素からウェスレーとピューリタンとの関係を論じる研究も登場している。次に挙げる六つの研究は、その種の研究の好例と言えよう。

まず、1982年にバングス (Carl Bangs) が著した論文である。彼は、ピューリタンの真摯さや断食、契約の概念、自己訓練、信徒説教者、巡回説教者、「世界が教区」の考え、讃美歌、即興の祈祷といったすでに指摘された要素にも補足説明をほどこす。たとえば、讃美歌はジェノヴァからピューリタンが持ち帰ったものだとして説明する。しかし、彼は、「暖かくされた心 (Warmed hear)」や「年会 (Conference)」といった新たな要素からもウェスレーとピューリタンの関連性を論じた。彼によれば、「暖かくされた心」はシブス (R. Sibbes) のテーマであった。また、年会に関しては、年会議事録の問答形式による記録様式が、すでにピューリタンによって使われていたものであったと指摘する²⁷。

また、1990年には、ランヨン (T.H. Runyon) がニュー・クリエイションのテーマでウェスレーとピューリタンとの関連に触れている。同テーマについてウェスレーが参照した文献として、ランヨンはアングリカンや古代ギ

²⁶ Alan C. Clifford, “Phillip Doddridge and the Oxford Methodists,” *Proceedings of the Wesley Historical Society*, Vol. XLII (1979) pp. 75-80.

²⁷ Carl Bangs, “Historical Theology in the Wesleyan Mode” (1982) 同論文は Wesley Center for Applied Theology, Northwest Nazarene University の <http://wesley.nnu.edu/WesleyanTheology/theojrnl> で見られる。巡回説教者については R.H. Martin, “Evangelical Dissenters and Wesleyan-Style Itinerant Ministries at the End of Eighteenth Century,” *Methodist History*, 16 (1977-8) 169-184 も参照せよ。

ロシア教父の文献とともに、バクスターの *Universal Redemption of Mankind by the Lord Jesus* (1664) を挙げている²⁸。

三つめとしては、前述のデイヴィスによる新たな視点からの1992年の興味深い研究である。この研究の中で、彼は、チャールズ・ウェスレーの讃美歌を介してジョン・ウェスレーがカルヴィニズムの影響を受けたと指摘する。チャールズはウェスレー以上にカルヴィニズムに対して敵対的であった。しかし、チャールズの讃美歌には「聖餐」や「契約の概念」の考え方においてカルヴィニズムからの借用がみられる。このような借用を有すチャールズの讃美歌からもジョン・ウェスレーは影響を受けていた²⁹。

1993年には、女性の役割に注目したチルコット (P.W. Chilcote) の *She Offered Them Christ* が、女性学に触発された興味深い視点からウェスレーとピューリタンの関連に切り込んでいく。彼は、優れた霊的指導者としてのスザンナの能力にピューリタンの要素を見出す。夫サムエル不在の教会や彼女自身の会でのスザンナの霊的指導力を、チルコットはスザンナがピューリタン家庭から引継いだものだと説明する。女性による霊的指導が可能であることを、ウェスレーは母スザンナの活動を見て学んだ。だから、後のウェスレーは女性にメソジスト運動への完全な参与を許せた。女性が霊的指導をすることについて、メソジストの男性会員のみならず女性会員自身も当時の社会通念のゆえに躊躇したが、ウェスレーはメソジストの女性会員たちによる証し (testimony) や奨励を認め促すことができた。チルコットは、急進的ピューリタンとされるクエーカーが女性説教者の伝統を有しており、クエーカーでは女性による奨励がなされていたことも説明する³⁰。

チルコットの説を肯定するものとして、2003年のロイド (Gareth Lloyd) の論文は非常に興味深い。マンチェスターのジョン・ライランズ図書館の職員であるロイドは、サラ・ペリンという女性からチャールズ・ウェ

²⁸ T.H. Runyon, "Importance of Experience for Faith," in R.L. Maddox ed. *Aldersgate Reconsider* (Nashville, 1990) p.100.

²⁹ Horton Davies, "Charles Wesley and the Calvinist Tradition," in S.T. Kimbrough Jr. ed. *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville, 1992), pp. 196-203.

³⁰ P.W. Chilcote, *She Offered Them Christ*, (Nashville, 1993), pp. 18-19 and pp. 50-59.

スレーに宛てられた手紙を分析した。サラ・ペリンは、メソジスト運動最初期からの協力者であり、ブリストルのニュー・ルームのハウスキーパーも任されていた人物である。ロイドの調査によって、彼女がメソジスト運動において奨励者としても活躍していたこと、そして、彼女が女性の奨励者の伝統を有すクエーカーの背景を持っていたことが分かった。ウェスレーは、ピューリタンの影響を受けた人物もメソジスト運動の指導者として重用していたのである。そして、そのような人物がピューリタンの伝統をメソジスト内で活用することをウェスレーは許容できた。サラ・ペリンのことは、ウェスレーがこのような人々とのメソジスト運動内での人的交流によってもピューリタンの影響を受けていたことを示す貴重な証拠である³¹。

最後に、同テーマでの大家モンクの最新の研究に言及する。モンクは、1999年に*John Wesley: His Puritan Heritage*を再出版した。ただし、この本は再版ではなく、改訂版である。彼は、ハイツェンレイターに勧められて改訂版を出す決心をする。1966年の初版本から33年間に他の研究者たちから指摘された多くの見解をこの改訂版の内容に反映している。この版で、モンクは多くの注意を次の二点に払った。一つはバクスターとゴッドウィンへのウェスレーの依存、もう一つは世（特に貧困者の扱い）とそれへの関わり方についてのウェスレーとピューリタンの教えや試みである。また、彼は、同書の「結論」部分にもかなりの加筆・修正を施している³²。

ロウなどの説明からは、1966年のモンクの研究以降の進展が省略されている。しかし、ウェスレーとピューリタンとの関連の研究は、古い視点での分析を掘り下げつつ、新たな視点による分析を加えて現在に至るまで絶えず進展し続けてきているのである。

II. 課題

³¹ Gareth Lloyd, "Sarah Perrin (1721-1787) : Early Methodist Exhorter," *Methodist History*, Vol. XLI (2003) pp. 79-88. クエーカーとの類似性の指摘は、ジョン A. ターナー『ウェスレー神学の中心問題』小出忍他訳、福音文書刊行会、1974、239-240 頁にもある。ターナーは、ロバート・バークレー (Robert Barclay) の完全論が、本質的にウェスレーと同じ立場であったと指摘する。

³² R. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (2nd ed., Lanham, 1999)

A. ウェスレーにおけるピューリタンの要素の位置付け

デイヴィスやニュートン、モンクがウェスレーとピューリタンとの関連についての総括的研究を試みたのは、その点での研究が立ち遅れていたという時代背景があった。その点から考えれば、彼らの研究がピューリタンの要素に偏重していると批判するのは的外れであろう。ウェスレーの神学や活動全体におけるピューリタンの要素の位置付けという作業は、当時の彼らにではなく、その後の研究者たちにゆだねられたと考えるべきである。だが、ピューリタンの要素をウェスレーの生涯全体のどの位置に置くかは非常に難しい。

ウェスレーとピューリタンの関連の位置付けにおいて、両極端な解釈がある。一つの解釈は、ウェスレーと彼の活動をピューリタンとしてとらえるものである。たとえば、ある事典ではメソジストのことを「近年に現れた新しい種類のピューリタンの一つ (one of a new kind of puritan lately arisen)」と記していることを、前述のニュートンが紹介している³³。別の解釈は、ウェスレーとその活動をアルミニウス主義者やアングリカン、あるいは高教会派の流れの中に位置付け、ピューリタンの影響を無視・軽視する。その解釈は、ウェスレーがピューリタンから何らかのものを借用したとしても、それらはウェスレーによってアングリカンなどの文脈の中に組み込まれ、アングリカンなどのために利用されたに過ぎないとみなす。しかし、多くの研究者は、ウェスレーにおけるピューリタンの要素と他の要素との混在を認め、その説明を試みている。彼らのアプローチの仕方を、便宜上、①静的分析のアプローチと②動的分析のアプローチの二つに分けて考察してみたい。

①静的分析のアプローチは、ピューリタンの要素と他の要素とを同列に置き、それらの中間にウェスレーを位置付ける。その方法の参照となるものに、野呂芳男氏の見解がある。野呂氏は、ウェスレーの信仰をプロテスタント的福音の焦点と高教会主義の焦点という二つの焦点を有す楕円というイメージで説明する。野呂氏のアプローチでは、プロテスタント的福音の要素も高教

³³ Newton, *Methodism and Puritan*, p. 1.

会主義的要素も基本的には対等な立場にあり、ウェスレーはその双方から影響を受けている。野呂氏はウェスレーにおいてその両方の要素を結ぶ靱帯として聖霊の役割を指摘し、ウェスレーの聖霊論を重視する³⁴。このような静的分析のアプローチの利点は、非常に理解しやすいという点にある。

一方、②動的アプローチは、絶えず成長し変化しつづけるウェスレーの信仰や活動内容の流動性を強調する。野呂氏も、ウェスレーが第一回と第二回の回心を経て成長したことなど動的視点からも考察している。しかし、動的分析の参考としては、アウトラーや藤本氏の研究のほうが分かりやすい。藤本氏は、ウェスレーの生涯を前期（1725-38）、中期（1738-65）、後期（1765-91）に分ける三区分法（正確には四区分法）を用いている³⁵。彼らの研究主題は、ウェスレーとピューリタンの関係にはない。しかし、ウェスレーの信仰・活動の内容が時間の経緯とともに変化するという視点を中心に持ってきた点で、ウェスレーのピューリタンの要素の動的分析に有益な示唆を与える。

先行研究が示すように、ウェスレーがピューリタンの諸要素を受容した時期は、個々の要素ごとに異なる。ウェスレーにピューリタンの影響を与えた人物や書物との出会い、ウェスレーの目をピューリタンの要素の有用性へと開かせた具体的な事件・出来事などといったものは時間的な間隔においてウェスレーに訪れた。それらの具体的な転換点をもとに、ウェスレーの生涯をいくつかの時期に区分できる。アウトラーや藤本氏の三区分法にとらわれずに、ウェスレーとピューリタンの関係という視点から独自の時期を設定したり、四区分、五区分・・・などともっと多く時期に区分を施すことも可能である。

また、動的分析のアプローチでは、ウェスレーがピューリタンの諸要素を段階的に取り入れ、それらを理路整然とまとめたと考える必要はない。すべての点でウェスレーに完璧を求める研究姿勢は、実際のウェスレー像から乖

³⁴ 野呂『ウェスレーの生涯と神学』633頁；野呂芳男『ウェスレー』人と思想95、清水書院、1991年、144-6頁；聖霊の役割については、H.リントシュトレーム『ウェスレーと聖化』やL.M.スターキー『ウェスレーの聖霊の神学』（山内一郎・清水光雄訳、新教出版社、1985年）が参考となる。

³⁵ 藤本『前掲書』432-433頁；M. Fujimoto, *John Wesley's Doctrine of Good Works*, Ph.D. dissertation, Drew, 1986

離するという危険がある。ウェスレーが取り入れたピューリタンの要素の中には、短期的にしかウェスレーに影響を及ぼさなかったものや、ウェスレーの中で曖昧に扱われていた要素もあった。ドナルド・ベイカー (Donald Baker) の論文は、ウェスレー兄弟のそのような曖昧な姿勢を指摘している。ベイカーは、ウェスレー兄弟がピューリタンの個の重視を思想的には支持したが、アメリカ独立革命での政治的見解ではその個の重視についての姿勢を明らかにせず「言葉をにごした (boggle) ようにみえた」と論じている³⁶。

動的アプローチの利点は、具体的事件・出来事に沿って時代を区分することによってウェスレーとピューリタンの関係をより正確に説明できることにある。しかし、欠点は、より正確さを期すと説明がより複雑となり理解しにくくなることである。動的アプローチと静的アプローチのどちらにも長短がある。

B. 各要素の再検討

ウェスレーにおけるピューリタンの要素の位置付け作業で重要なものは、その作業の材料となる証拠である。デイヴィスやニュートン、モンクは、ピューリタンと関係すると思われる証拠のみをウェスレーから抽出し、証拠を提供した。しかし、それらの証拠のなかには明らかにピューリタンからの借用であると分かるものもあれば、ピューリタンとの類似性を指摘できてもピューリタンに根拠があると断定しにくいものも存在する。後者の証拠に対しては、当然、その真正を確かめるための再検討が要求される。このような再検討という分野でも、これまでに多くの研究がなされてきている。以下、そのような検討のなされた三つの具体的要素を挙げる。

まず、カルヴィニズムとウェスレーの経済倫理の共通性を指摘し、ウェスレーとピューリタンの関連の分析に道を開いたウェーバーの説の再検討である。1977年の岸田紀『ジョン・ウエズリ研究』は、ウェーバーがウェスレーの言葉を摘要するさいに自説に適うよう史料操作をしていることを明らか

³⁶ Donald Baker, “Charles Wesley and the American War of Independent,”

にした。ウエスレーの言葉を自説の標語として用いたウェーバーだが、蓄えた富を困窮者に「できる限り施せ」と命じたウエスレーの言葉をウェーバーは削除していたのである。実際のウエスレーの経済倫理には、国教会高教会派の経済倫理の流れを汲む要素が見られるのである³⁷。

次に、ソサエティーなどメソジストの組織形態や運営方法に関してである。メソジストのそれらとピューリタンのそれらとのあいだに類似性は見られる。しかし、それらの起源をピューリタンだけに求めることはできない。シュミットは、メソジストの組織形態をキリスト教知識普及協会の流れとの関連で説明している。また、深町正信氏の『ウエスレーの信仰とメソジスト教会』（1996）は、1666年に起源があるエクレシオラエ・イン・エクレシア、アングリカンの宗教集会、モラヴィア派のバンド組織、さらにはカトリックのものにまで起源をさかのぼっている³⁸。

母スザンナの影響についての再検討も活発になされている。エプワース牧師館で母スザンナからウエスレーが受けた影響については、ラップ

（Gordon Rupp）は高教会派的要素を強調している³⁹。野呂氏も、家庭での指導は高教会主義にも見られる方法であると断じている。実証的な手法を用いたウォレス（Charles Wallace）の *Susanna Wesley* は、スザンナの信仰日記をつける慣習や子供の教育方法について、ピューリタン以外の諸要素からの影響とのバランスをとって論じている⁴⁰。

Proceedings of the Wesley Historical Society, Vol. XL (1976), p.132.

³⁷ 岸田紀『ジョン・ウエズリ研究』ミネルヴァ書房、1977年、19-29頁。

³⁸ Martin Schmidt, “Wesley’s Place in Church History,” in K.E. Rowe ed. *The Place of Wesley in the Christian Tradition* (1976) pp. 69-75; 深町正信『ウエスレーの信仰とメソジスト教会』ウエスレー研究会パンフレット No.9、更新伝道会、1996年、89頁。ソサエティーの起源の詳細は John S. Simon, *John Wesley and the Religious Societies*, (2nd ed. London, 1955) や R.P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodist* (Nashville, 1995) pp. 17-25 を参照されたい。

³⁹ Gordon Rupp, “Son of Samuel: John Wesley, Church of England Man,” in K.E. Rowe ed. *The Place of Wesley in the Christian Tradition* (Metuchen, 1976) p. 41

⁴⁰ 野呂『ウエスレー』78頁；Wallace, Charles, *Susanna Wesley: The Complete Writings* (Oxford, 1997), pp. 17-19, 197-9, and 368-9.

モンクなどによってウェスレーから抽出された「ピューリタンの要素」は、このように後の研究者によって各要素ごとに再検討がなされてきており、行過ぎた解釈は是正され健全な解釈に正されている。

これらの各要素の再検討に関連して、もう一つ重要な研究動向がある。それは、ピューリタンという枠組み自体の認識の変化を引き起こす新たな研究動向である。その研究は、ウェスレー以前の時代にすでに広がっていたキリスト教の流れ、あるいは、複数の教派を跨いで広がる「霊性のうねり」といったものに注目する。藤本氏の『ウェスレーの神学』では、ラップが論じる「内的宗教 (inward religion)」や、アウトラー (A.C. Outler) が指摘する「聖なる生活の神学者たち (holy living divines)」として紹介されている⁴¹。また、近年では、キャンベル (T.A. Campbell) が「心の宗教 (a religion of the Heart)」というものを指摘している。キャンベルはウェスレーの「心が妙に暖かくなった」という体験を「心の宗教」の影響と関連づけて考える⁴²。このように、教派を超えて広がっていたキリスト教の流れが重視され、ピューリタンという枠組みを用いた分析の有用性が問われつつある。ウェスレーとピューリタンの関連の研究では、何をピューリタン独自の要素としうるかという新たな課題にも注意を払う必要がある。

結語

ピューリタンの影響はウェスレーの中心的要素とは言えないかもしれない。しかし、先行研究は、もしピューリタンが存在しなかったならば、今日我々が知っているウェスレーも存在していないことを示唆する。それ故、ウェスレーを正しく理解するために、ウェスレーとピューリタンの関連についての研究は今後も重要な一研究テーマとして追及され続けていくであろうし、また、追求し続けられねばならない。

⁴¹ 藤本『前掲書』9-10頁。

⁴² T.A. Campbell, “The Way of Salvation,” in D.W. Chilcote ed., *Wesleyan Tradition: A Paradigm for Renewal* (Nashville, 2002), pp. 78-86.

本稿でみたように、ジョン・ウェスレーとピューリタンとの関連についての研究は、両者の関連を示す新たな要素の発見、それらの要素をウェスレーの全体像にどのように位置付けるかという作業、その作業の材料となる各要素の再検討、そして、ピューリタンという枠組み自体の変容への対応といった、複数の領域での研究が平行して進行している。モンクが著した金字塔的研究は、このテーマについての研究の終点ではなく、たった一つの指標に過ぎなかった。今後も、各領域での研究の進展とともに、ウェスレーとピューリタンとの関連についての認識は深まり、かつ、見解も絶えず修正され変化していくことであろう。

(日本大学法学部専任講師)